

発達障害のある幼児・学童の指導の充実と新規開発、および指導方法の啓発

大阪医科大学 小児高次脳機能研究所
(現 大阪医科薬科大学 小児高次脳機能研究所)

玉井 浩、福井 美保、奥村 智人 ほか

1.概要

指導の充実と新規開発については、書字に困難がある児童への指導方法について iPad を導入し、学校との連携の可能性を含めて検討した。またディスレクシア群と非ディスレクシア群で学習の基礎的技能の差異の有無について、語彙力に注目して分析を行い、語彙力の重要性を確認した。これらの成果についてはオンラインで開催された学会において発表した。

例年、対面で行っていた講演会は期間限定配信でのオンデマンド制により開催することにし、大阪医科大学 LD センター20 周年記念講演を動画配信とした。機器整備を含め動画配信のためのシステム構築を行った。

保護者への啓発としては、参加者人数を制限してアート講座を開催した。

2.実績

2.1 指導方法の充実と新規開発ならびに指導方法の啓発

開催日	1) 2020年5月30日～31日 2) 2020年10月10日～11日 (リアルタイム配信)、(アーカイブ配信は10月30日まで)
開催場所	1) 2) ともオンライン (1)、2) は上記日程、以下同様)
主催	1) 日本コミュニケーション学会第46回大会 (東北大学) 2) 日本LD学会 第29回大会 (兵庫)
参加者総数と その内訳	1) 大会参加者延べ人数 2600名 2) 大会参加者総数 3672名 10月中のアクセス延べ人数は 19345名 いづれも大会参加者は学会員と非学会員。

内容	<p>1) 「発達性ディスレクシアの有無による語彙力や学習の基礎的 技能の検討：日本版 KABC-II 「習得検査」をもちいて」の演題 で口頭発表を行った。LD センターで検査を実施した 92 名につ いてディスレクシアの有無で検査結果に相違があるか分析を行 った結果、ディスレクシア群は読み尺度、書き尺度、語彙尺度 で有意な低下を認めた。</p> <p>2) 「書字に困難がある児童への支援機器を用いた合理的配慮の 実践例」の演題でポスター発表を行った。標準範囲内の全般的 知能を有している書字障害のある事例に対して、アセスメント に基づく指導を実施した。指導にはタブレットの利用を含め、 適したアプリの選択と使い方への習熟を促した。学校での宿題 プリントについても、タブレットを使用することについて合理的 配慮として申請し学校の承諾を得た。</p>
アンケート	両発表とも、オンライン上の質問可能期間での質問は特にはな かった。学会によるアンケートの実施はされていない。
成果	<p>1) かな文字のデコーディング障害とデコーディングを基礎する 様々な読み書き技能の獲得困難やデコーディング障害と語彙力 低下との関連が示唆され、語彙の指導の重要性が示唆された。</p> <p>2) 事例はタブレットを用いることによって拒否していた課題に 取り組めるようになり、調べると分かることがある事を理解し て、学習に対して意欲をもてるようになった。学校関係者に対 して、タブレット等 ICT を活用することが児童の意欲と可能性 を引き出すことにつながることを示すことができた。</p>

2.2 発達障害のある幼児・学童の理解と指導方法の啓発に関する講演会の開催

開催日	2020年11月29日～12月6日まで1週間の限定配信
開催場所	オンデマンドによる動画配信
主催	大阪医科大学 LD センター（現大阪医科薬科大学 LD センター）
参加者総数 と その内訳	<p>20周年記念講演会の参加者総数 779名</p> <p>（内訳）北海道から沖縄まで全国からの視聴があった。職業の 内訳は学校関係者 35%、医療関係者 16%、福祉・療育関係者 14%、公的機関 9%、保護者 16%、就学前施設 2%、その他 8%。</p>
内容	20周年記念講演会の講師は東京大学先端技術研究所の近藤武 夫准教授に「教育の未来に向かって～教育での ICT 活用～」と

	題して講演いただいた。あわせて LD センター所属言語聴覚士竹下盛より、センターでの ICT 活用の指導例について報告した。講師には講演内容と時間数を示して動画撮影を依頼し、LD センターにて編集したものを期日指定で配信した。ネットによる講演会を実施するにあたり、申込、案内などは Peatix を利用し、動画自体は vimeo にて視聴可能とするなどのネット配信のための環境構築を行った。
アンケート	実施せず
成果	ネット視聴にしたことにより、日本全国から多数の視聴があった。大阪医科薬科大学 LD センターの所在地がある関西地方からの申込みは全体の 40% で、半数以上が関西圏外からの視聴であった。このことは、発達障害の理解・指導法の啓発をさらに全国に広めていくことの足がかりとなった。

2.3 保護者への啓発：アート講座

開催日	2020 年 8 月 25 日、8 月 30 日
開催場所	大阪医科大学 LD センター
主催	大阪医科大学 LD センター
参加者総数 とその内訳	参加者総数 15 名 (内訳) 7 名 (保護者) 児童 (8 名)
内容	8 月 25 日に保護者に向け「保護者のためのアートプチ講座：アートが育てる子どもの力」として藤井昌子氏（色彩学園主宰）による学習会を実施した。8 月 30 日には児童が来所し、好きな画材、道具を用いて表現活動に取り組んだ。
アンケート	実施していない
成果	集団場面や自由に表現することの苦手な子どもも、個々のペースで参加することを認められる創作活動に参加することにより、自己表現することができた。 保護者は、子どもの作品について「うまい下手」という観点ではなく表現をそのまま受け止めることが大切であることを学び、子どもの作品を肯定的にとらえて褒める場面がみられた。

3.成果

今年度はコロナ禍の中で、オンライン開催となった学会発表による指導方法の啓発については、対面開催と異なりなかなか手ごたえが得られなかった。また、夏休み期間に実施していた発達障害のある子どものための作文教室は中止となった。そのため、言語表現活動に関する保護者への啓発はかなわなかった。

一方、保護者への啓発（学習会）と子どもの活動のうち「アート講座」については、人数を制限し感染対策を十分に行った上で開催し、参加者から好評を得ることができた。

講演会に関しては、対面での実施を計画していたため中止となったものもあったが、web配信に切り替えて実施したことにより、対面時よりもより広い地域から、またより多くの参加者があり、発達障害に関する啓発を行うことができた。20周年記念事業として行った記念講演会には800名近い申込があり、学習へのICT活用に関する関心の高さが示唆された。

LD学会大会においてポスター発表を行った内容を含めた発達障害のある子どもの指導におけるICT活用についての講演で、新しい形での指導方法の開発とその啓発に役立てることができた。

4.課題と展望

今年度の講演会は、オンデマンドで実施したため視聴者からの質疑は受け付けることができなかった。リアル配信であれば講師とオンタイムで質疑応答が可能になるため、今後はリアルタイム配信のための準備を進めていきたいと考えている。

保護者への啓発活動については、web配信による講演会形式ではむずかしい部分があり、感染症への対策をした上で、どのような形式で実施できるのかが今後の課題である。